

衣服にほどこされたアイヌ紋様とその色彩 (第1報)

荒井純子

On the Pattern and Color of the Ainu Clothing (1)

Ayako ARAI

The pattern designed on the clothing of the Ainu may be not only typical of the race but also unique in the world.

It is considered that various kinds of pattern, especially used by the Ainu during the Edo-period, might have something to do with the two types of original design such as *Aiushi* and *Moreu*.

Based upon the technical classification of 64 clothes, this paper mainly deals with the composition of design and relationship between the patterns and the ancient legends of the Ainu.

序 論

我が国の北方にのみ生存していたという、アイヌ民族の衣服は、昔は草衣 (kera) 獣皮衣 (kap-ur) 鳥皮衣 (rap-ur) 魚皮衣 (chep-ur) などであったが、江戸時代の後半期より木綿、絹などの布地が交易によって入手出来るようになり、彼等の衣服として用いられるようになってからは、現在土俗品として保存されている厚司 (attushi) レタルペ (latarupe) チカルカルペ (chikar-karpe) ルウンペ (ruunpe) カパラミップ (kaparamipp) チヂリ (chigiri) モウル (mour) などである。

これ等衣服の形態は我が国の着物とほとんど異っていないが、衣服にほどこされている紋様は彼等特有のもので他の民族衣裳には見られないものである。そこで土俗品として保存されている衣服を出来るだけ沢山調査することにより衣服にほどこされている紋様を分析してみようと思う。

本 論

彼等の紋様には多くの種類があるが男の手による男紋様と、女の手による女紋様がある。

男紋様とは……男子が小刀で骨角や木器に刻む紋様で、これをイヌエ (inue) と呼ぶ平面的な彫刻紋様である。女紋様とは……女子が縫針で皮革或は繊維で作る衣類その他の服飾品にほどこす刺繡によって作る紋様でイカルカル (ikarukaru) という。男紋様無比立体感のある紋様である。女子は小さいときからこれを練習している。いくら練習しても上手に出来ないものは上手な人にならぬので紋様の型を書いてもらったという。この下絵を基準として彼等特有の技術がほどこされて見事な衣服に仕上げられたわけである。こうして出来た紋様はその子女の評価の対象となっている。巨酋の衣服は巨酋だけの豊麗な刺繡を肩の上から脊一ぱいにつけている。この美しい衣服の作れる婦人が酋長の妻となったということが文献に出ているが、それが出来る程の者であると同時に身分

の低い者は上手に出来ないばかりかやることも許されなかったのかもしれない。

衣服にほどこされている各種の紋様は、その表現の多少によってまったく異った感じを見る人に与えるがこれ等を分類して見ると次のようになる。即ち技法的な分類と形態的な分類である。

技法的な分類 織込紋様 切伏紋様 刺繡紋様の三種である。

1. 織込紋様……これは厚司の布地にあらわれた縞紋様のことである。厚司を織るとき、経糸の一部に一定間隔に、黒 褐色 ねずみ みどりなどの色に染めた糸を何本か入れて織りあげたものである。昔は色染めに、クルミ、カンワ、カツラ、ハンノキの内皮の煎汁を使用したが、後には市販の染料を使用している。(染色については染色の項で記載する予定) この紋様はすべてたて縞紋様である。

2. 切伏紋様……これは木綿又は絹の裂片を布地の上に縫いつけたものでイエチウヌ (iechiwnu) という。これには細い裂片を布地の上に置いて切伏せしたもので即ち布裂置紋様と、大きな白い布を布地の上に置き、紙切り細工のようにいろいろな紋様を浮き出させた白布切抜紋様がある。

3. 刺繡紋様……これは布地の上に切伏せ布をおかずに、直接布地に刺繡をしたものである。即ちオホカラ (ohokara) またはイカラカラ (ikarakara) という。

以上三種のうち2, 3, は本学紀要第7集で報告しているのでその項をご覧ください。

紋様の状態としては、この切伏紋様と刺繡紋様がそれぞれ特徴のある形をあらわすこともあるが、両者が組合されて形成されていることが多い。

形態的な分類 紋様を形成する単位となる形態はアイウシ文とモレウ文である。

1. アイウシ文 (aiushi) (図1 1-2)

刺がある文様という意味であるが、数字の括弧に似ているので括弧文ともいわれている。(図1の1)この単位を連続して、図1の2の紋様をあらわしている。アイヌ紋様にもっとも多くあらわれている紋様で他の民族にはあまり使用されていない。厚司の切伏の上にさされた刺繡紋様は古いものではこのアイウシ文だけである。カバラミップでは切伏紋様の中央に必ずこのアイウシ文の刺繡が連続模様でほどこされている。

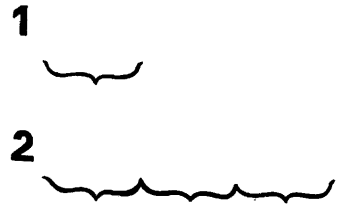


図1 アイウシ文

2. モレウ文 (moreu) (図2)

かたつむりの巻形のように渦を描いた紋様で静かにゆるやかに曲っているという意味である。巻き方は少く、一まき 半巻き又はそれ以下のものである。この紋様は我が国の縄文土器にも見られるが、アイヌのものとは少々異っている。又中国 東南アジア エジプト ギリシャ 蒙古 オロコなどにも似た紋様がある。



図2 モレウ文

以上二つの文様はアイヌ紋様の元になるものでこれを軸として、各種の紋様に展開してゆくのである。

3. アイウシ文の変化 (図3, 4)

1. 向いあって網の目状に並んだもの。
2. 中央に直線があって、二つに分けられたもの。
3. 二段重ねたもの。
4. 向いあわせたものをダブらせたもの、中央の菱形はシク文である。
5. アイウシ文に属するがシクノカ文という人もある。
6. 5のアイウシ文を中央より、分離させつりがね形にした文である。

7. ハート形のもの

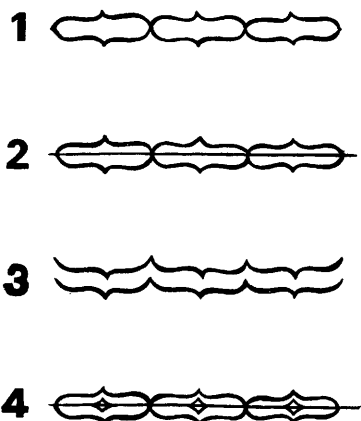


図3 アイウシ文の変化

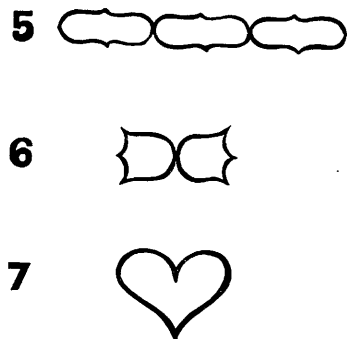


図4 アイウシ文の変化

4. モレウ文の変化 (図5, 6)

1. アラ・モレウ (ara-moreu) (片巻紋様) ……もっとも簡単なもので一個だけ単独に片巻紋様になっている。刀掛帯 (エムシ・アツ) の飾り布 袖口などの紋様に使用されている。
 2. ウレン・モレウ (uren moreu) (両巻紋様)
 - ウホシ・モレウ (uhoshimoreu) ……左右対称的に外巻つまり脊中合せに並ぶもの
 - ウエコテ・モレウ (uekotemoreu) ……内巻つまり向いあって並ぶもの
 - ウタサ・モレウ (utasa moreu) ……一つのモレウと他の一つのモレウが反対に向き合っているもの
- 1・2のモレウはモレウ文の基本的なものである。

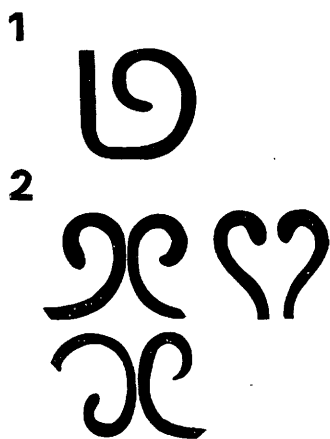


図5 モレウ文の変化

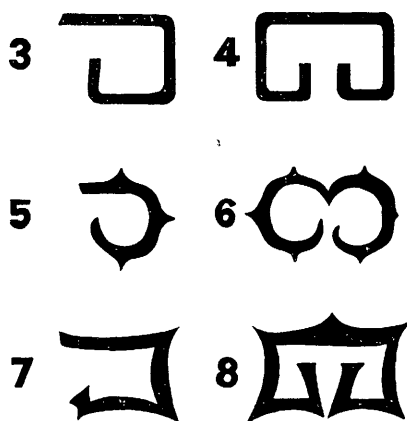


図6 モレウ文の変化

3. アラ・シツケヌ・モレウ (ara shickeunu moreu) (角形片巻紋様)
1のモレウに角型の四隅をつけて、かど張らせたものである。
4. ウレン・シツケヌ・モレウ (uren shickeunu moreu) (角形両巻紋様)
2のモレウにかど張らせたものである。
5. アイウシ・アラ・モレウ (aiushi ara moreu) (刺付片巻紋様)
モレウに刺をつけた片巻紋様である。
6. ウレン・アイウシ・モレウ (uren aiushi moreu) (刺付両巻紋様)
ウレン・モレウに刺をつけたものである。
7. シッケウ・アイウシ・アラ・モレウ (shickeu aiusi ara moreu) (角形刺付片巻紋様)
アラ・シツケヌ・モレウに刺を入れたものである。
8. ウレン・シツケヌ・アイウシ・モレウ (uren shickeunu aiushi moreu) (角形刺付両巻紋様)
ウレン・シツケヌ・モレウに刺をつけたものである。

以上はアラモレウの種々な形の表現である。曲線で書かれたものが直線に構成されて、三角形に又曲線に刺をつけて強さをましたものなどである。

5. アイウシ文とモレウ文の混合変化 (図7)

1. からくさ文 (ブンカル文) (pun karu)
チヂリや樺太アイヌのレタルベに多くあらわれている。ブンカルとは蔓のことである。
2. モレウ・エトコ (moreu etoko)
モレウ文の先端が玉状になったもの、右側はアイウシ文にからませたものである。
3. 葵文

アイヌ衣服 装身具類に多く見られる紋様である。ウレン・モレウの上に山形文がついて、菱形が出来ている。シクウレン・モレウ、アイウシ・ウレンモレウと云う人もあるが葵の葉状になっているものが多い。

6. その他の文 (図8)

1. ウタサニ文 (utasani)
十字文である。彼等にはキリスト教信者が多い。渡来した宣教師が物心両面の救世主であったため、そのシンボルである十字形が衣服に紋様としてほどこされた理由ももうなづける。
2. シク文 (shiku)

これは菱形または三角形紋様であり、アイウシ連続模様の間につかわれることが多い。シク文の一角を丸形でうめたものを、ルートル・セシケ (rutoru-sesike) という。

3. アパポーピラスケ (apapopirasuke)

花の開いた形の紋様である

4. アパポーエプイ (apapoepui)

花の芽又はつぼみの形の紋様である。

その他の文 これ等四種は前にも記したようにアイウシ文・モレウ文の中間にたくみにあらわさ

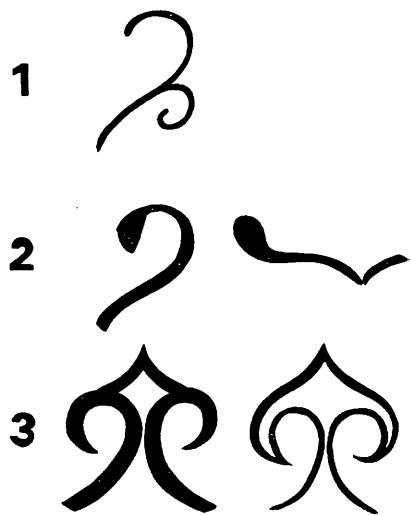


図7 アイウシ文モレウ文の混合変化

れている。

彼等の衣服にほどこされている紋様は、以上のものが上下に、或は上下を逆に、又は一列に二個或は四個と、曲線又は直線の集合を各種に配列して、多種多様の紋様を作り出している。ゆるやかな曲線モレウに、直線の鋭いシッケ・モレウを組合せた彼等特有の原始紋様は、まったく異った性格のものを巧みに調和させている。

各種衣服の紋様

本報告の対象とした土俗品として保管されている64枚の衣服の紋様を調査するにあたり、技法的な分類によって次の四種に分類した。

各種の衣服を更に分類して代表的なものを取りあげ、これ等にほどこされた紋様を形態的に解明して見たいと思う。

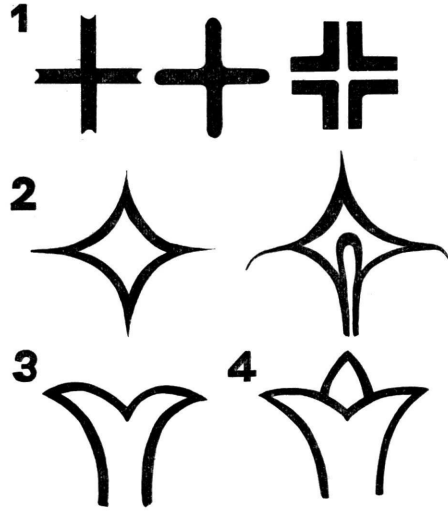


図 8 その他の文

(資料64枚の衣服は早稲田大学文学部史学科資料室蔵のものである)

種類	枚数	備考	
黒裂切伏	8	アツシ チカルカルペ	
色裂切伏	巾2cm	12	31 ルウンペ 白布切抜まざり…1
	3cm	10	
	4cm	8	
	4cm以上	1	
白布切抜	23	カバラミツ 色裂切伏のまざり…1	
刺繍のみ	2	チヂリ当布のないもの	
計	64		

図 9 当布による衣服の分類

1. 黒裂切伏の衣服

1. 地布厚司の上に黒い布を角形のアイウシ文状に並べ、当布の上又は当布から当布にかけて、アイウシ文を二つ合せて網目状にしたり、又中央に一本入れたり、シクノカ状に又つりがね形ハート形などいろいろに変化をつけて、チェーン・ステッチによる線縫いがしてあり、当布による表現を複雑化している。黒い当布の先きの刺繍（オホヤンケ）が目立っている。これはオヒヨオ・アツシで古い時代のものである。

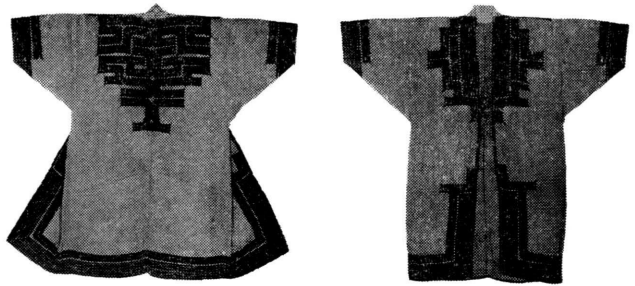


図 10 黒裂切伏衣 1

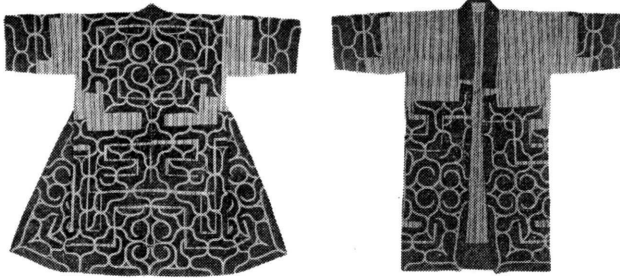


図 11 黒裂切伏衣 2

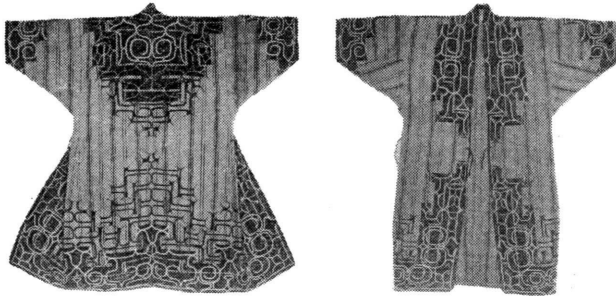


図 12 黒裂切伏衣 3

2. 縞の厚司の上に黒布を角形アイウシ文にはりつけ、当布と当布にかけてアイウシ文を主としてその変形及びモレウ文 葵文 シク文などを刺繍によって表現している。前よりも一層刺繍による表現が大きくなっている。衿は黒無地の掛衿とし、胸には当布及び刺繍がほどこされていない。

3. 当布の巾が二種類使用されているが、広い巾のものとせまい巾のものとよく調和させている。せまい巾のもので角形モレウを表現し、オホヤンケが目立っている。広い巾の部分には、当布と当布にかけて アイウシ文 モレウ文の線縫が目立つように表現されている。数の少い紋様であり、このように当布の先きでオホヤンケを表現するのは古い時代のものようである。

この三種の黒裂切伏の衣服は地布として、厚司を使用しているが、各種の木綿衣に使用する場合もある。この衣服がアイヌ本来の衣服であり、沙流川地方では儀式用にはこれを使用するという。又静内地方では男子用のもので平常着であるという。上川地方、近文地方のアイヌには刺繍衣の外はこの黒裂切伏の衣服が多い。

2. 色裂切伏の衣服

1. 当布 2cm 巾のもので主として紺木綿無地を地布として、当布に赤白の木綿又は絹 小袖類の縮緬 倫子など色どりよくとり合せてある。巾のせまい当布でアイウシ文の角形や角形モレウ状にとじつけ、更に当布の中心にアイウシ文を刺繍して落つけてある。当布と当布の中間に別布の当布を配色よくとりつけてあり、当布の組合せで葵文 シク文を表現している。これは豪華な紋様である。

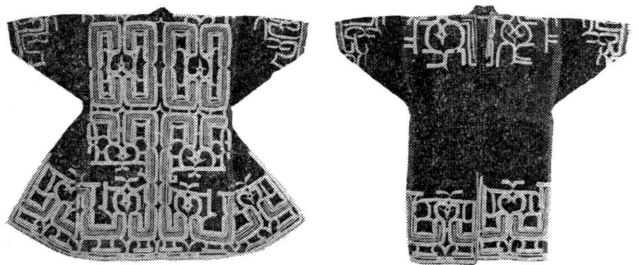


図 13 色裂切伏衣 1

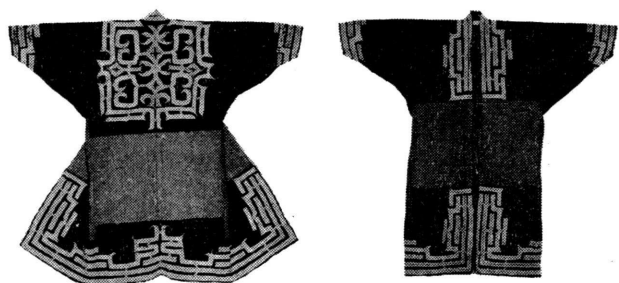


図 14 色裂切伏衣 2

2. 2 cm 巾の当布をアイウシ文 モレウの変形にとじつけてあるが、前の衣服と異った傾向が見られる。当布の中央にアイウシ文が刺繍してあり、地布は各種のものが使用されている。背上部 裾の下部のみに紋様が表現され、あまり豪華さはないが、当布白のほか紅絹・倫子など絹物も使用して色をそえている。

3. 2 cm 巾の当布と 0.7cm 位の当布をモレウ状にとじつけているが、つる草をおもわせる表現が多い。当布は白と赤を使用している。当布の中央又は当布と当布をむすぶようにアイウシ文の線縫がしてある。赤や紫のメリンスなども少々使用してあり、線縫には彼等の自製糸が見られる。函館地方のアイヌにこの種の衣服が多いように思う。

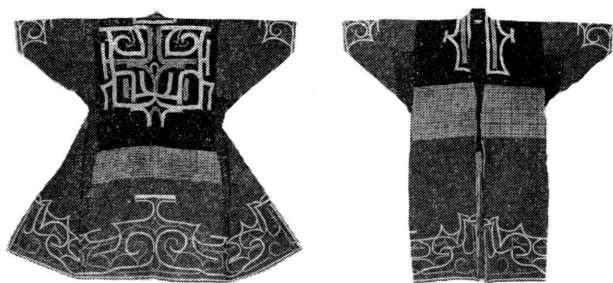


図 15 色裂切伏衣 3

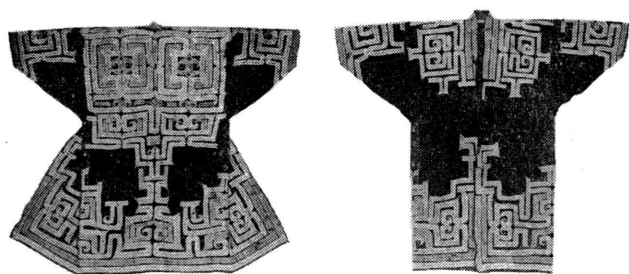


図 16 色裂切伏衣 4

4. 3 cm 巾の当布を角形モレウに表現している。白い当布の中に赤又は柄の別布を巧みにとり入れている。背中に葵文を大小4個とり入れた豪華な紋様である。自製糸 金糸などを使用して当布にコーチングステッチでアイウシ文がほどこされている。

5. 3 cm 巾の当布を角形両巻紋様に配置したものであり、各所に葵文を構成させている。当布と当布にまたがせて、こまかなアイウシ文を刺繍して当布による紋様を更に細かく又強い表現にしている。はぎ合せた各種の地布がそれぞれによく調和している。



図 17 色裂切伏衣 5



図 18 色裂切伏衣 6

6. 3～4 cm 巾の当布と巾のせまい当布の白と赤又は模様の絹布をとりあわせてある。角形モレウの先端が細くまげられて刺が強く表現されている。袖口はアイウシ文と片巻紋様が形よく組合せられている。背中のモレウ文の中に菱文が向きあっている。

7. 3～4 cm 巾の白と赤を主とした当布を使用して角形両巻紋様のモレウの先端を極端にまで細くとがらせて表現しており、美しい葵文がところどころに構成されている。地布は主として紺木綿 当布の赤と同様に模様のある布をあちこちに少々配置してポイントにしている。美しく表現されたモレウ文は目玉のような陰しさを与え、当布中央のアイウシ文の表現と共に技術的にも美しいものである。

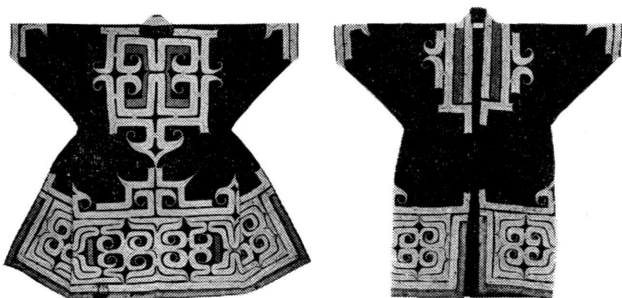


図 19 色裂切伏衣 7

8. 3 cm 巾の当布がアイウシ文の変化紋様を表現しているが、モレウ文葵文を巧みにからませた紋様を背紋のように背中に切抜きとして、或は当布として特殊な技法で表現している。裾の当布中央にアイウシ文のコーティングステッチがしてある。

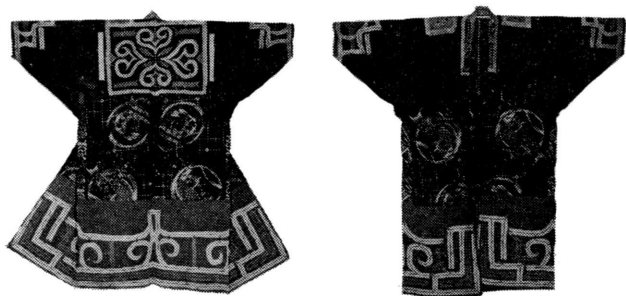


図 20 色裂切伏衣 8

以上色裂切伏の衣服は虻田 白老地方に多く使用されたものようであるが、当布の入手によってその使用状態がちがってくる。古い時代のものは巾がせまく、しかもその時代の小袖など各種のものが少量づつ使用されている。巾の広いものは一種類のものをゆつたりと使用しており、時代の流れを感じさせる。尚衣服の中には上部 裾部 袖部などまったく異ったものを使用しているものもある。これは交易などにより入手したときに、一部分づつ作ってゆき2～3年を径て作りあげたもので、表現の方法もちがうものがある。

3. 白布切抜の衣服

1. 白布切抜の代表的な紋様である。後身ごろ全面に8個の刺付片巻紋様が大まかに配置されている。よく見ると左右対象的に配置されていないのに、均衡がとれて美しく調和している。うずまきとうずまきの間にシク文その中にウタサニ文を表わしている、背全面から前裾にかけて広範囲を一模様であらわし、衿と袖口には殆んど紋様はない。

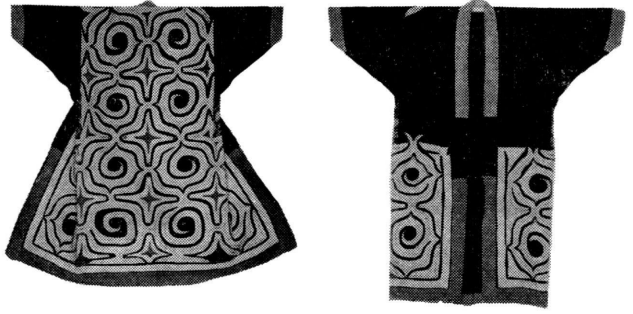


図 21 白布切抜衣 1

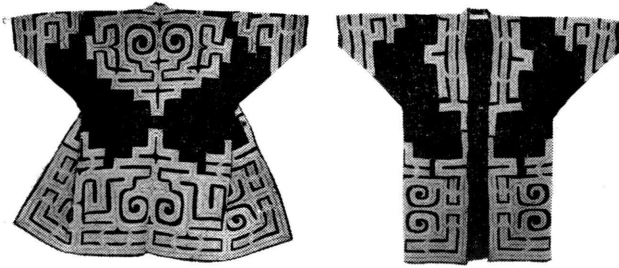


図 22 白布切抜衣 2

2. 角形片巻紋様とアイウシ文の変形が主である。後身ごろ背と裾、前身ごろ裾に両巻紋様をはっきり表現させている。背中央にウタサニ文・シク文が入れられ、白布の中央に大まかに見事なアイウシ文が刺繡されている。

3. 両巻紋様と角形両巻紋様をよく調和させたものである。背中央にシク文が目立ち、モレウの大きな切り抜きに別布がとり合せてある。ほどよいウタサニ文もみられる。背上部の角形モレウの当布の上には細かなアイウシ文をコーチングで現し、裾部は大まかなアイウシ文で現している。そしてこれ等がよく調和して美しい。



図 23 白布切抜衣 3

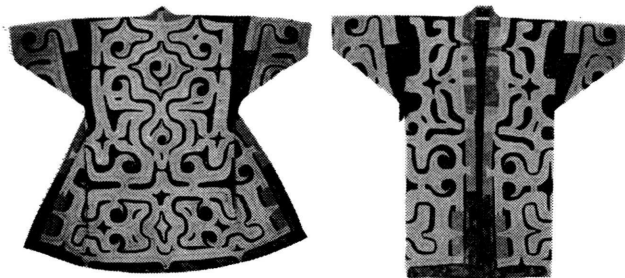


図 24 白布切抜衣 4

4. 大きな白い布を貼りつけて、その布を細い切抜で刺付片巻紋様 刺付両巻紋様に表現している。モレウに刺をつけたものである。細く切ったモレウを目立たせるため、モレウの先端にモレウ・エトコのような玉を現はしている。この衣服は前身 後身及び袖など全面に切り抜きがほどこされている大作である。白い当布の中で衿付ぎわ、裾先などの赤又は

模様布が目立ち当布中央に二重コーチングのアイウシ文がほどこされている。

5. 角形刺付片巻紋様 角形刺付両巻紋様が組合されている。裾側に葵文が大きく前後に表現されており、背には、シク文 ウタサニ文が赤又は模様布で各所につくられている。袖口は角形刺付片巻紋様が美しく表現され当布中央のコーチングのアイウシ文でモレウ文を一そうはつきりと表現している。

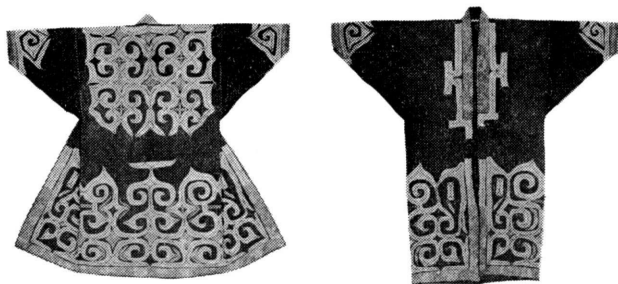


図 25 白布切抜衣 5

以上白布切抜の衣服は主として日高地方の静内辺りに多く使用された紋様のものであるが、後には日高全域にひろがったものらしい。静内地方は上下の様子が連続しており、沙流川地方は上下が別れている。紋様の大きさも静内地方は大きく、沙流川地方はやや小さい。又奥地にゆくほどモレウのまげ方が強く険しいようである。

4. 刺繍のみの衣服

当布は全くあてずに刺繍のみで紋様を表現している。アイウシ文を主とした紋様の中に葵文 シク文を表現する手段としてモレウ文が少々あつかわれている。アイウシ文とモレウ文だけでは単調に流れやすいのでシク文 ハート文 つりがね文などいろいろとり入れることが多い。地布は紺地が主で、糸は自製糸又はたこ糸風の太い糸を使用している。この種の衣服は日高東部あたりで発祥

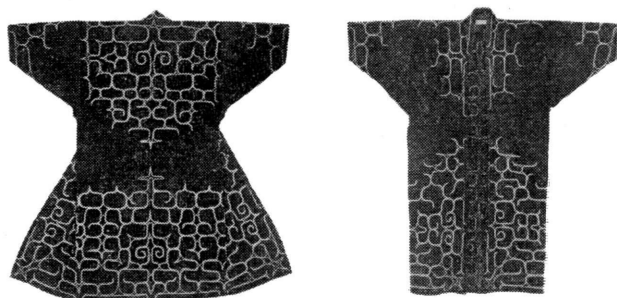


図 26 刺繍衣

したものようであるが、現在では上川地方近文アイヌに多く見られる衣服である。

衣服にほどこされた紋様の意図

アイヌ紋様は芸術品であると云はれるが、これ等の紋様が何のためにほどこされたものであるか、非常に興味深く思はれる。男子が刀のさやをはじめすべての器物にほどこした男紋様、女子が針の先きを見つめながら愛する夫へこころをこめて刺し上げた女紋様、ともに呑気な生活をいとみなながら生れたものではなく、彼等の日常は自然の圧力や外部から侵す者に対して、緊張した生活の連続であった。こうした中で身体を包む衣服への願いには、まさに護身の意が強かったということとは充分うなづけると思う。

衿から、裾、袖口に必ずほどこされている網目紋様のアイウシ紋様は、網を張って病魔が入って来ないように道をふさいだものであると、網はうっかりするとからみついて手足の自由をうばうものであるからという。

前にも記したように、アイヌ民族にはキリスト教信者が多く、この点から紋様の中に十字の形、ウタサニ文があるが、大きいものは脊面に、小さいものは前裾、袖口など種々な部分に配置されている。シク文は星の形とか星の目といって魔物を追い払う呪力があるといい、魔物の狙いそうな乳房の上とか背中につけられている。神の目という巴型の紋様、モレウ文が背中、乳房の上などに監

荒井：衣服にほどこされたアイヌ紋様とその色彩（第1報）

視の目を光らせている。その他つる草、かにのはさみなど形どったものもあるが、これはつる草のつるで巻いて入れないように、かにのはさみで捕えるように、星の神様に守っていただく意味があるという。実際背面に大きなモレウ文が二個もついていると、見ているだけでにらまれているような錯覚をおこすことがある。これ等は飾りばかりでなく、何日も山谷に泊りこんで生活しなければならなかった彼等の、外敵への自己防衛のためのおどしであったとも見られるが、それと同時に精神的な自己満足のためにほどこしたものであるとも考えられる。

結 論

彼等の衣服にほどこされている紋様の元になるものはアイウシ文、モレウ文の二種であり、これを軸として各種の紋様が表現されているがその主なものとして、アイウシ文は七種の変化に、モレウ文は八種の変化に、アイウシ文・モレウ文の混合変化として三種、その他として四種の四項目に分類してみた。彼等はこの四項目のものを曲線又は直線に多種多様に配列して、如何に異った性格のものでも実に巧みに調和させている。本報告の対称とした64枚の資料の紋様を解明するにあたって、同系統のものとして分類することは出来ても、同じものは一枚も見出し得なかった。私共がこの研究に着手してから各地を調査して凡そ300枚に近い資料を手がけているが、これらについても全く同じことが云えるのである。彼女達がこの紋様を作り出す手段としては、紋様の下絵を描いたり、型紙を作ったりしないで、直接布地の上に行っている。小さい時から彼女らの遊びは屋外では砂地で、屋内では炉端の灰の上で衣服の紋様の手習いをすることであり、紋様を書くことに専念しているのである。そして上手に紋様の出来ることに大きな夢をえがいていたわけである。こうして出来たアイヌ衣はすべて彼女らの心をこめた一品の衣服なのである。

終りに本研究に資料提供並びにご指導、ご協力下さった早稲田大学助教授桜井清彦先生、北海道大学名誉教授故児玉作左エ門先生、東京家政大学名誉教授故宮下孝雄先生に心から感謝を申し上げます。

（本研究は本学旧職員藤原智恵子助教授・荒井倭子との共同研究であり、本稿の一部は昭和44・45年日本家政学会総会において発表している）

参 考 文 献

- 1) 杉山寿栄男著：日本原始繊維工芸史 土俗篇 原始篇
- 2) 金田一京助・杉山寿栄男共著：アイヌ芸術
- 3) 鷹部屋福平著：北方文化研究報告 アイヌ服装紋様の研究
- 4) 名取武光著：ドルメン第三巻 第四巻 アイヌ土俗品解説(二)
- 5) 喜田貞吉著：ドルメン第四巻 アイヌは南方系か北方系か
- 6) 金田一京助著：ドルメン第一巻 アイヌのハヨクペ アイヌの黥
- 7) 渡辺 仁著：民族学研究第16巻 沙流アイヌに於ける天然資源の利用
- 8) 伊勢秦穂丸撰 常陸間宮倫宗増補：蝦夷生計図説
- 9) 民族工芸研究会：北海道原始文化聚英
- 10) 河野広道著：蝦夷往来第3号 アイヌ織物染色法
- 11) 知理真志保著：分類アイヌ語辞典
- 12) 更科源蔵著：北方文化シリーズ I
- 13) 河野広道著：北方文化シリーズ II IV
- 14) 更科源蔵著：アイヌの四季

東京家政大学研究紀要第13集

- 15) 河野広道著作集刊行会：北方文化論
- 16) 北海道教育委員会：アイヌ民族資料調査報告
- 17) Rev John Batchelor : The religion superstitions and general history of the hairy aborigines of Japan. The Ainu of Japan.
- 18) Dr John Batchelor : Ainu life and lore.
- 19) George Montandon : La Civilisation Ainouet les cultures aretioues.
- 20) 荒井純子・藤原智恵子：東京家政大学紀要 第2集 アイヌ民族の衣生活について
- 21) " " 第3集 "
- 22) " " 第4集 "
- 23) 荒井純子：東京家政大学紀要 第5集 "
- 24) " " 第6集 "
- 25) " " 第7集 "